

宗 像

浦 谷 古 墳 群 II

宗像市文化財調査報告書

第 16 集

1988

宗像市教育委員会

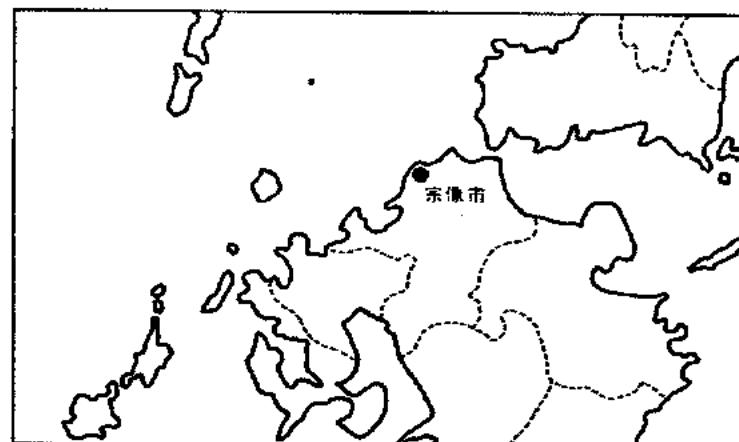


宗 像

浦 谷 古 墳 群 II

宗像市文化財調査報告書

第 16 集



1988

宗像市教育委員会

序 文

本市の歴史は古く、弥生時代の遺跡をはじめ、古墳時代の墳墓が500近く市内各地に分布し、豊富な埋蔵文化財があります。このたび、宅地造成に伴う開発事業ということで、止むなく発掘調査を実施しました。古墳時代のものが多数見つかりましたが、調査終了時には現地説明会を行ない、多数の参加者を得ることができました。浦谷古墳群がある朝町周辺には、全部で100近くの古墳があり、遺跡の宝庫といえます。

昭和56年度も、浦谷古墳群を調査し、40近くの古墳を発掘しましたが、今その地には自由ヶ丘中学校が建ち、600名もの生徒が学んでいます。豊かな自然環境の中にある、多くの歴史教材に囲まれた学舎といえます。

なお、市の文化財の保護と調査に力を尽くされた、酒井仁夫氏（主任主査）が、この1月に急逝されました。42才の若さでした。市の文化財活動が軌道に乗り始めた矢先のことでした。遺憾の限りであります。

ここに報告書を添えて、酒井氏のご冥福をお祈り申し上げます。それと共に、皆様方には、古代宗像の歴史を解明するための報告書として、広く御高覧下さいますようお願いいたします。

1988年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 竹原瑛

例　　言

1. 本書は、（仮称）青葉台団地宅地造成に伴い、1987年度に実施した緊急発掘の調査報告である。
2. 発掘調査は、平和農産工業株式会社の委託を受けて、宗像市教育委員会が実施した。
3. 本書に使用した図の作製、製図は、原俊一、清水比呂之、安部裕久、藤井隆晴、板橋皓世、清家直子、徳永映子が行った。
4. 本書使用の写真撮影は、原、清水が行った。また空中写真は「空中写真 稲富」に委託した。
5. 本書の編集、執筆は清水が行った。
6. 図版の遺物番号は挿図番号に一致する。

本文目次

	本文頁
I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	5
IV 古墳群の調査	11
1. F群の調査	11
2. J群の調査	19
3. 朝町山ノ口遺跡23号墳	27
V まとめ	29

挿図目次

第1図	関連遺跡分布図 (1/50000)	3
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25000)	4
第3図	浦谷古墳群I・IIの古墳分布 (1/2500)	6
第4図	F・J群地形測量図 (1/400) と各古墳上面観 (1/80) 実測図	7・8
第5図	F・J群地形測量図 (1/300)	9・10
第6図	F-5号墳閉塞石実測図 (1/40)	11
第7図	F-5号墳主体部実測図 (1/40)	12
第8図	F-5号墳出土遺物実測図 (1/3)	13
第9図	表土中出土遺物実測図 (1/3)	13
第10図	F-5号墳出土遺物実測図 (1/2)	13
第11図	F-6号墳閉塞石実測図 (1/40)	14
第12図	F-6号墳主体部実測図 (1/40)	15
第13図	F-6号墳出土遺物実測図 (1/3)	16
第14図	F-1号土壤実測図 (1/20)	17
第15図	F-2号土壤実測図 (1/20)	18
第16図	J-1号墳出土遺物実測図 (1/3)	19
第17図	J-1号墳閉塞石実測図 (1/40)	19

第18図	J-1号墳主体部実測図 (1/40)	20
第19図	J-2号墳出土遺物実測図 (1/3)	21
第20図	J-2号墳主体部実測図 (1/40)	22
第21図	J-3号墳閉塞石実測図 (1/40)	23
第22図	J-3号墳出土遺物実測図 (1/2)	23
第23図	J-3号墳主体部実測図 (1/40)	24
第24図	J-4号墳主体部実測図 (1/40)	26
第25図	朝町山ノ口遺跡23号墳現況測量図 (1/300)	28
第26図	周辺遺跡分布図 (1/25000)	図版1左図

表 目 次

第1表	石室計測表	27
第2表	鉄関係遺跡地名表	29

図 版 目 次

図版1	浦谷古墳群Ⅰ・Ⅱ航空写真 (1/12500)	
図版2	F群 (南から) F-5号墳 F-6号墳 J群 (北から) J群 (西から) J-2 (右) - 3 (左) 号墳	
図版3	F-5号墳全景 (南から) F-5号墳閉塞石と遺物	
図版4	F-6号墳全景 (南から) F-6号墳閉塞石と遺物	
図版5	J-1号墳閉塞石 (奥壁から) J-1号墳遺物出土状況	
図版6	J-2号墳全景 (南から) J-2号墳遺物出土状況	
図版7	J-3号墳全景 (南から) J-3号墳閉塞石 (奥壁から)	
図版8	J-4号墳全景 (南西から) 朝町山ノ口23号墳 (保存古墳・北から)	
図版9	朝町山ノ口23号墳 (東から) 朝町山ノ口23号墳 (西から)	
図版10	F-5号墳出土土器 F-6号墳出土土器 J-1号墳出土土器 J-2号墳出土土器	

I はじめに

昭和61年、大字朝町字浦谷の宅地造成に先立ち、試掘調査が行われた。それにより、円墳6基が確認された。このうち5基については、昭和56年度報告の浦谷古墳群Ⅰと同丘陵上にあり、浦谷古墳群の一支群としてとらえられる。また残りの1基は、市道朝町一昼夜線の南側に存在し、丘陵を異にしている。

本調査は、昭和62年5月11日～8月4日まで行われた。それにより、浦谷古墳群としてさらに1基が確認され、計6基を調査した。今回の報告は、前回報告分と区別するため、浦谷古墳群Ⅱとする。

また市道をはさみ南側に位置する古墳1基は、昭和57、58年度調査の朝町山ノ口遺跡の古墳群の一つとしてとらえられる。そこで、これを朝町山ノ口遺跡23号墳とした。さらに23号墳は、所有者の平和農産工業(株)との協議の結果、将来公園化し、現状保存することになった。古墳の内容については、IV～3章を参照されたい。

なお、調査された遺構の実数は以下のとおりである。

浦谷古墳群Ⅰ (昭和56年度報告)	浦谷古墳群Ⅱ
古 墳 47基 (未調査5基、消滅3基)	古 墳 6基 (前回未調査のうち2基調査)
小石室 5基	土 墳 2基
窯 跡 1基	保存古墳1基 (朝町山ノ口遺跡23号墳)
火葬墓 1基	

調査にあたっては、平和農産工業(株)および地元各方面、福岡教育大学から、協力をいただき、ここに感謝の意を表したい。

調査関係者

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	竹原 瑠
		教 育 部 長	白木 国明
		社会教育課長	吉田 繁利
		社会教育係長	井上 弘
庶務・会計		主 事	大賀由美子
調査担当		主 任 主 査	酒井 仁夫
		主 任 主 事	原 俊一
		技 術	清水比呂之
		技 術 師	安部 裕久

II 位置と環境

宗像市は北九州市と福岡市のほぼ中間に位置する。宗像市のはば中央を釣川が流れ、玄界灘に注ぎ込む。釣川により形成された沖積地は広がりをもち、その周囲を丘陵地が取り囲む。

特に、朝町川、高瀬川、八並川といった支流を集める中流域は、宗像最大の沃野である。田熊から東郷、曲、南郷がその地にあたり、この沃野を中心に古代遺跡群が集中する。

周辺には、宗像最古の4世紀末の前方後円墳(東郷高塚)①があり、現在は消滅したが6世紀代の前方後円墳(スペットウ古墳)②もこの沃野を望んでいた。また高瀬川の北側の丘陵地には、久原遺跡③があり、6世紀中葉の前方後円墳1基を含む、4世紀から7世紀にかけての古墳が50基調査された。

浦谷古墳群④は、釣川水系の上流域に位置する。本古墳群は釣川の中流域に流れ込む朝町川と、その支流荒掘川にはさまれた丘陵上に立地し、標高80mと高位である。

本古墳群に近接する遺跡としては、朝町百田遺跡と朝町山ノ口遺跡⑤があげられる。朝町百田遺跡は、荒掘川をはさんで、本遺跡の対岸の丘陵上に位置している。また朝町山ノ口遺跡は、南側の低丘陵上に立地する。共に6世紀後半から7世紀にかけての古墳群で、7世紀代の古墳群にまとまりがある。特筆すべき遺物としては、朝町山ノ口遺跡5号、6号墳主体部(6世紀後半)から、鉄鋸、鉄鎌の鍛冶工具が出土している。

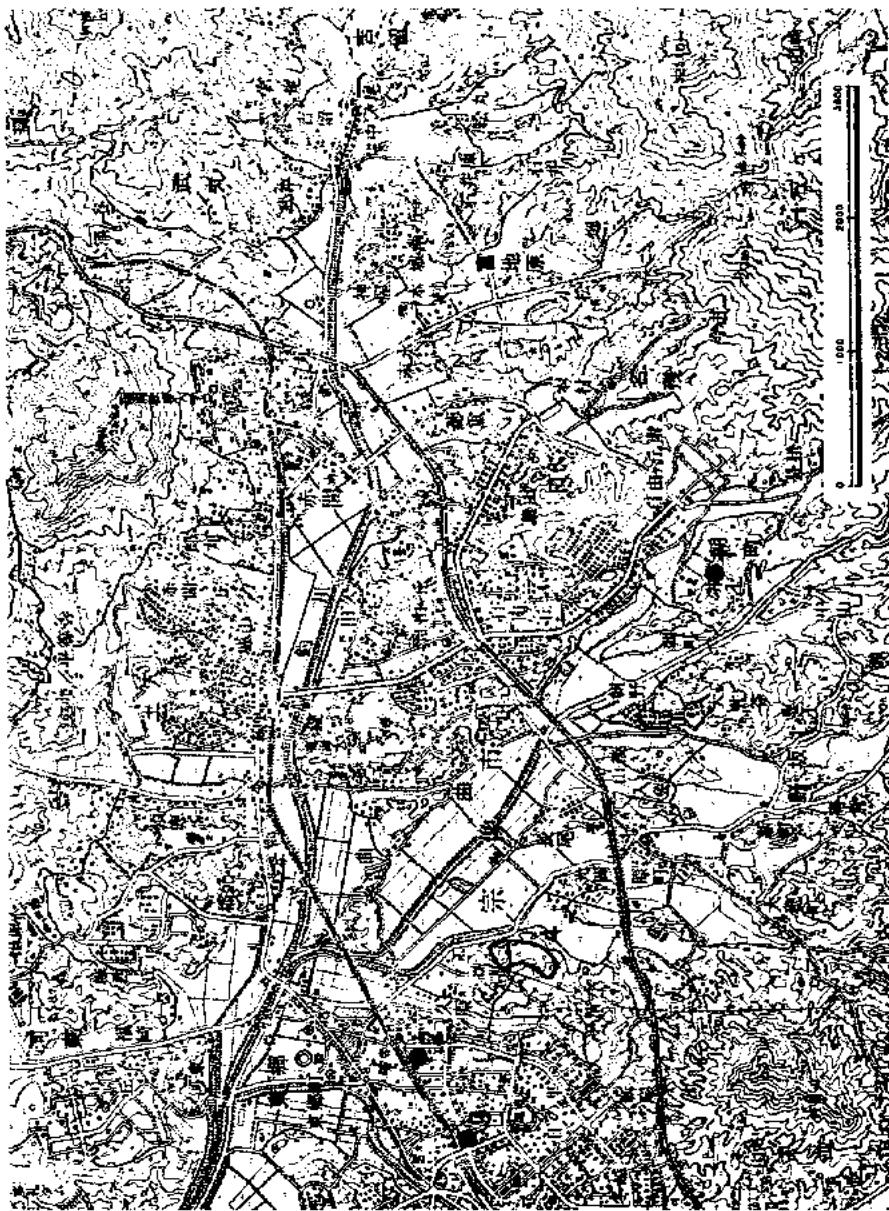
また本古墳群の位置する丘陵は、北西にのび、その先端部に朝町町ノ坪遺跡がある。この遺跡からは弥生時代中期の住居址群と6世紀のカマドを有す住居址群が検出された。

野坂一町間遺跡⑥は、磯部山(232.4m)から北にのびる丘陵上に位置し、古墳時代の住居址群が検出されている。特に1号住居址内から2基の鍛冶炉跡が発見され、5世紀代のものと考えられる。

以上、浦谷古墳群の位置する釣川上流域の遺跡群には、7世紀代の古墳群にまとまりがあり、また鉄生産に関する遺構にも、一つの分布があるといえる。

註

- 1 昭和61~63年度にかけて、墳丘および主体部の確認調査を行っている。
- 2 波多野院三「スペットウ古墳(東郷1号墳)」『東郷遺跡群』 1967
- 3 宗像市教育委員会『久原遺跡』宗像市文化財調査報告書第19集 1988
- 4 宗像市教育委員会『浦谷古墳群1』宗像市文化財調査報告書第5集 1982
- 5 宗像市教育委員会『朝町山ノ口1』宗像市文化財調査報告書第14集 1984
- 6 宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書』宗像市文化財調査報告書第9集 1985



第1図 関連遺跡分布図 (1/50000)

1. 蒲谷古墳群 I・II 2. 東郷高塚 3. スベットウ古墳 4. 久原遺跡



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

- 1. 南谷古墳群II
- 2. 浦谷古墳群I
- 3. 朝町山ノ口遺跡
- 4. 朝町百田遺跡
- 5. 朝町山添遺跡
- 6. 朝町町ノ坪遺跡
- 7. 野坂一町間遺跡
- 8. 光島長尾遺跡
- 9. 曲香畠遺跡

III 調査の概要

浦谷古墳群は、大字朝町、字浦谷、給田に分布する古墳群をさしている。前回の56年度報告分が浦谷古墳群Ⅰで、今回の報告分が浦谷古墳群Ⅱである。同一丘陵上に分布する古墳群であることから、前回使用した支群名と、遺構番号をそのまま踏襲した。

浦谷古墳群Ⅰでは、各古墳の立地と時期から、9支群に分けている。具体的には、A～I群に分類しているが、浦谷古墳群Ⅱでは、新たにJ群を設定した。J群は、F群が分布する標高約80mの丘陵の高まりから、南東方向に伸びる尾根上に立地する。そして4基の古墳で構成される。

また浦谷古墳群Ⅰでは、F群として5基の古墳をまとめている。その内の1基は未調査であったが、今回それを調査し、前からの連番でF-5号墳とした。さらに前回の未調査古墳で、I群にまとめられると推定された古墳は、時期的にF群と考えられるので、これをF-6号墳とした。

そして市道をはさんで、南側に位置する朝町山ノ口遺跡23号墳（現況保存分）については、現況測量と現況写真的撮影のみを行った。

以下、F群とJ群について概略する。

F群 古墳6基で構成される。但し、F-5、6号墳のみ、浦谷古墳群Ⅱとして取り扱う。標高約80mの丘陵南側斜面に分布する。いずれも主体部は、南側に開口する横穴式石室である。出土遺物は須恵器とF-5号墳から鉄鏃が2点発見された。またF-5号墳の周溝内から、2基の土壙が検出された。

J群 古墳4基で構成される。標高約80mの尾根の南側と東側に分布する。いずれも主体部は、南側に開口する横穴式石室である。出土遺物は須恵器と、J-3号墳から、鉄刀、耳環、刀装具が発見された。

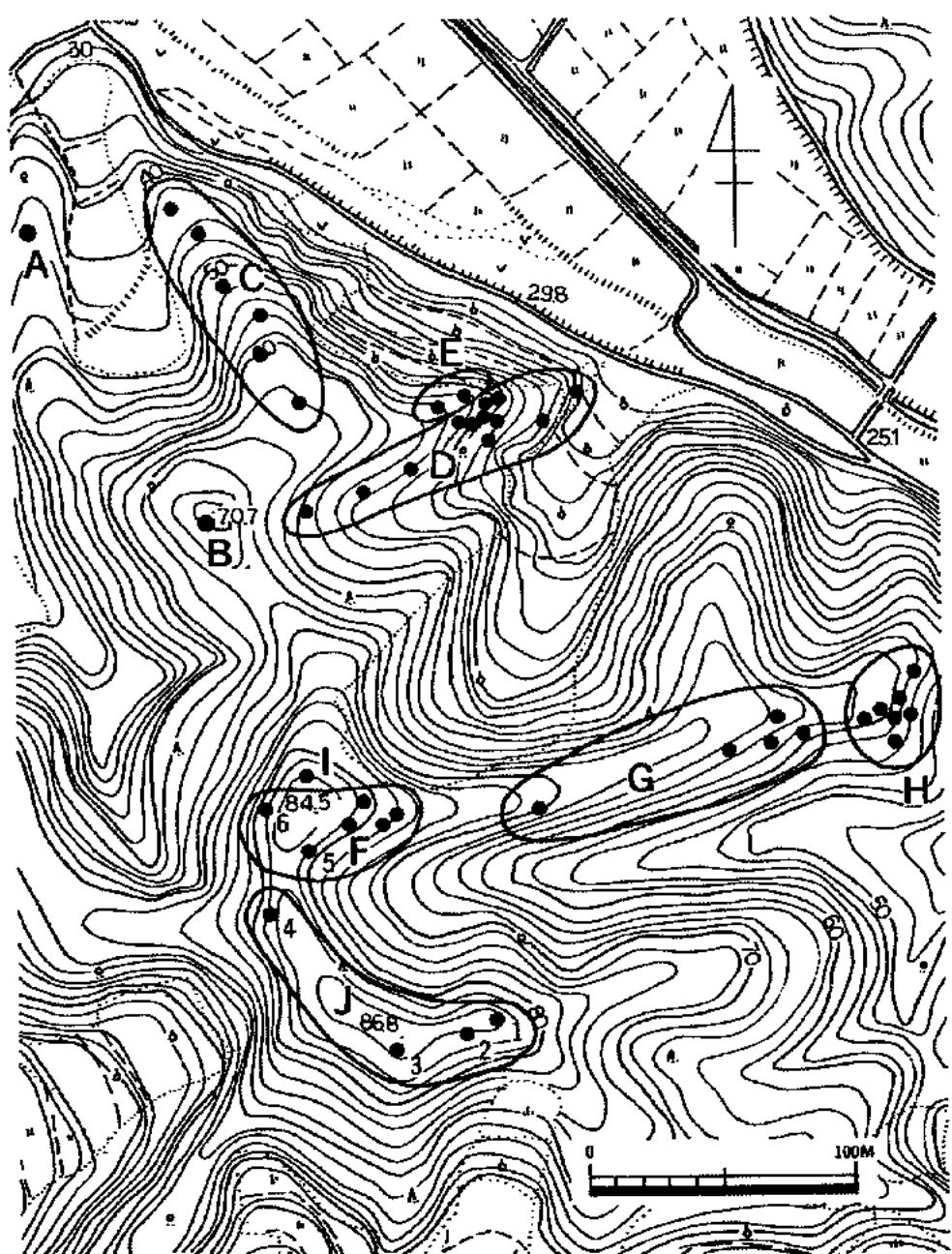
浦谷古墳群Ⅰ、Ⅱの全体で、45基の古墳が調査された。古墳群は東及び北に伸びる5つの尾根上に分布している（第3図）。

浦谷古墳群Ⅰでは、古墳の築造時期からⅠ期とⅡ期に分類している。

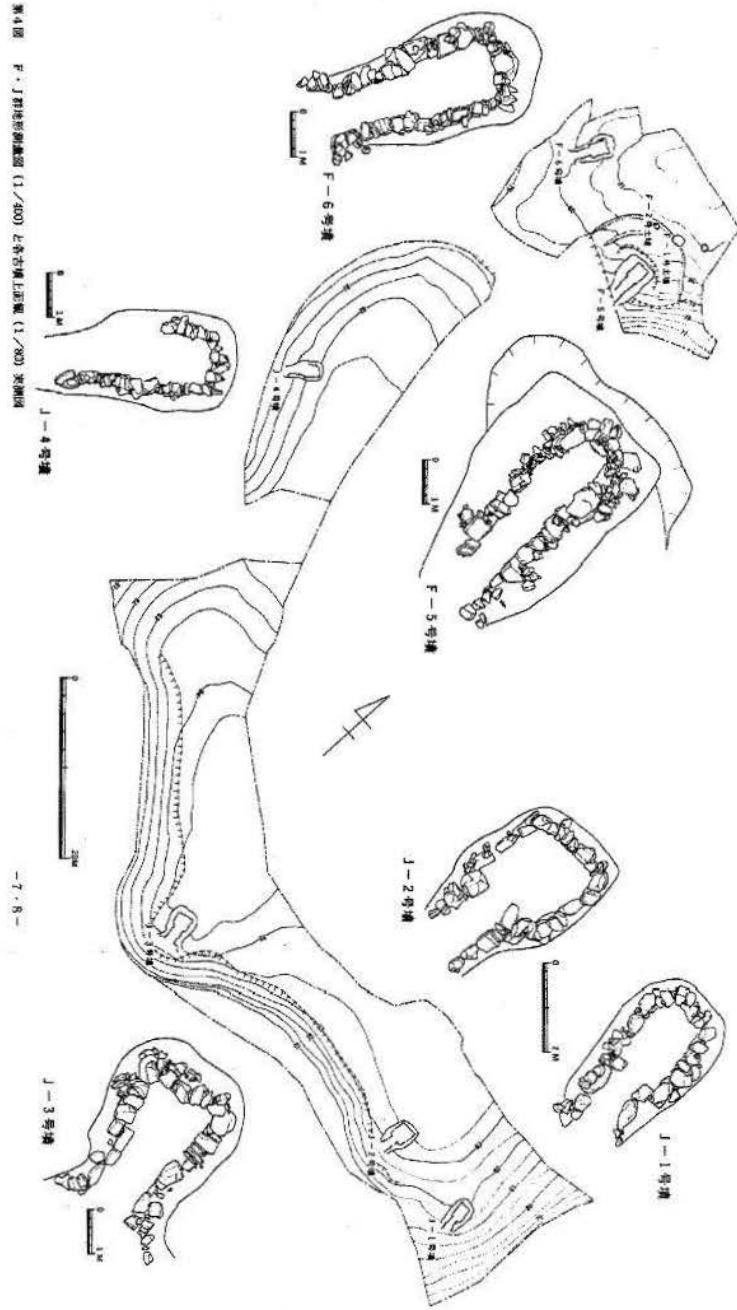
I期 A、B、C、E、I群の11基。時期は5世紀中葉から6世紀前半である。尾根線上に占地し、内部主体は全てほぼ西に開口する。

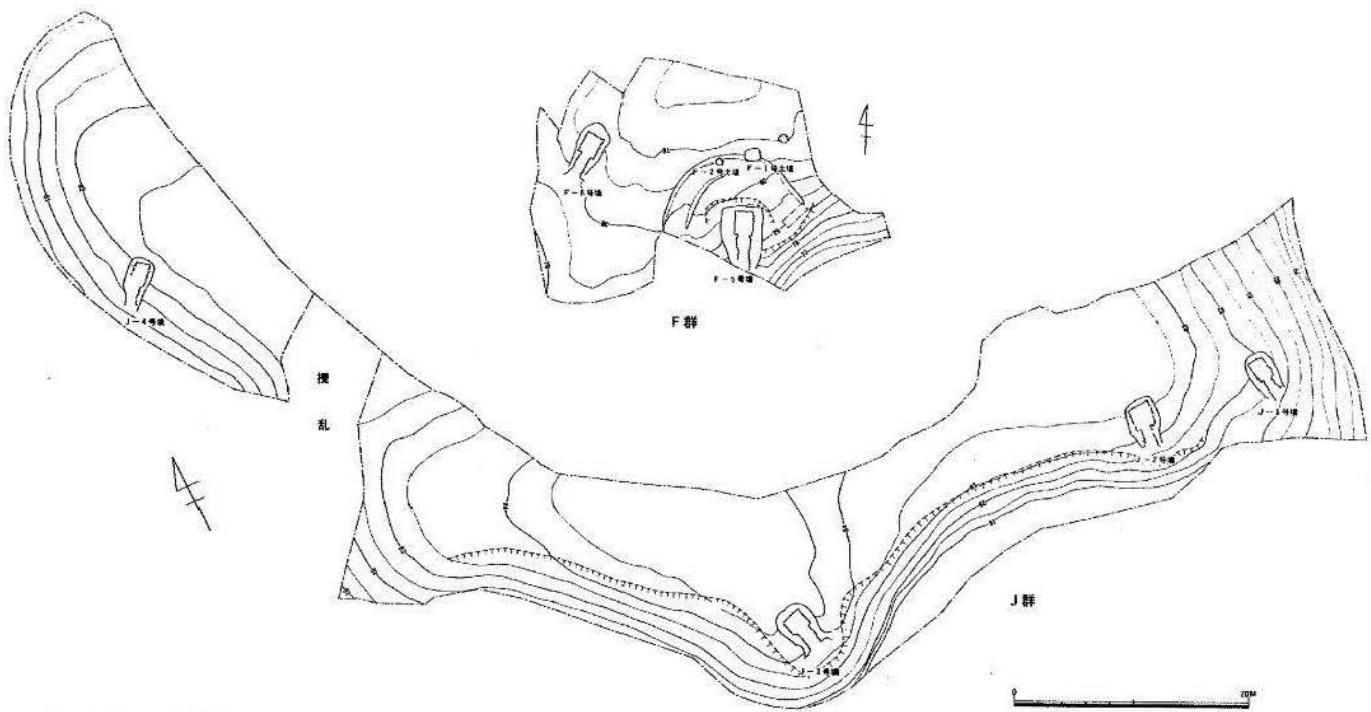
II期 D、F、G、H群の30基（浦谷古墳群Ⅱの2基を含む）。時期は7世紀初頭から7世紀後半である。尾根の南側斜面に占地し、单室の横穴式石室で、ほぼ南に開口する。

なお、J群の4基の古墳については、占地状況、石室形態、須恵器の年代から、Ⅱ期として位置づけられる。



第3図 蒲谷古墳群I・IIの古墳分布 (1/2500)





第5図 F・J群地形測量図 (1/300)

IV 古墳群の調査

1. F群の調査

F群は標高80m前後の丘陵の南側に分布している。古墳6基で一群を構成しているが、今回の報告分はF-5号墳とF-6号墳である。またF-5号墳の周溝中から、2基の土壙が検出された。

1) F-5号墳

本古墳は標高80mの丘陵南側斜面に位置している。墳丘は流出していたが、地山整形面で幅約2.5mの馬蹄形の周溝を検出した。主体部の北側を囲むように周溝が掘られ、南側の急斜面に至る所で消失する。また前庭部の一部と西側の周溝の端は、重機により削平されていた。

(1) 主体部(第7図)

石室掘り方は長軸を南北にとり、丘陵南側の急斜面を掘り込んでいる。石室は長軸を南北にとる単室の横穴式石室である。玄室平面形は方形に近いが、長軸がやや長い。腰石は奥壁と左側壁に2石、右側壁に3石使用している。床面は奥壁側が荒らされ、特に奥壁手前には擾乱坑が掘られていた。

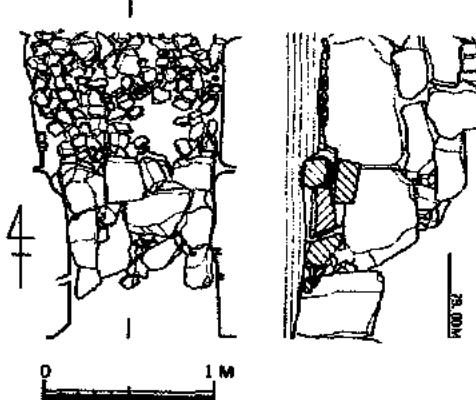
袖石は両袖式で、縦長に石を据えている。羨道部には樋石が2ヶ所設けられており、閉塞は第2樋石上で行われている(第6図)。

また腰石の石材は、礫岩と砂岩が用いられている。

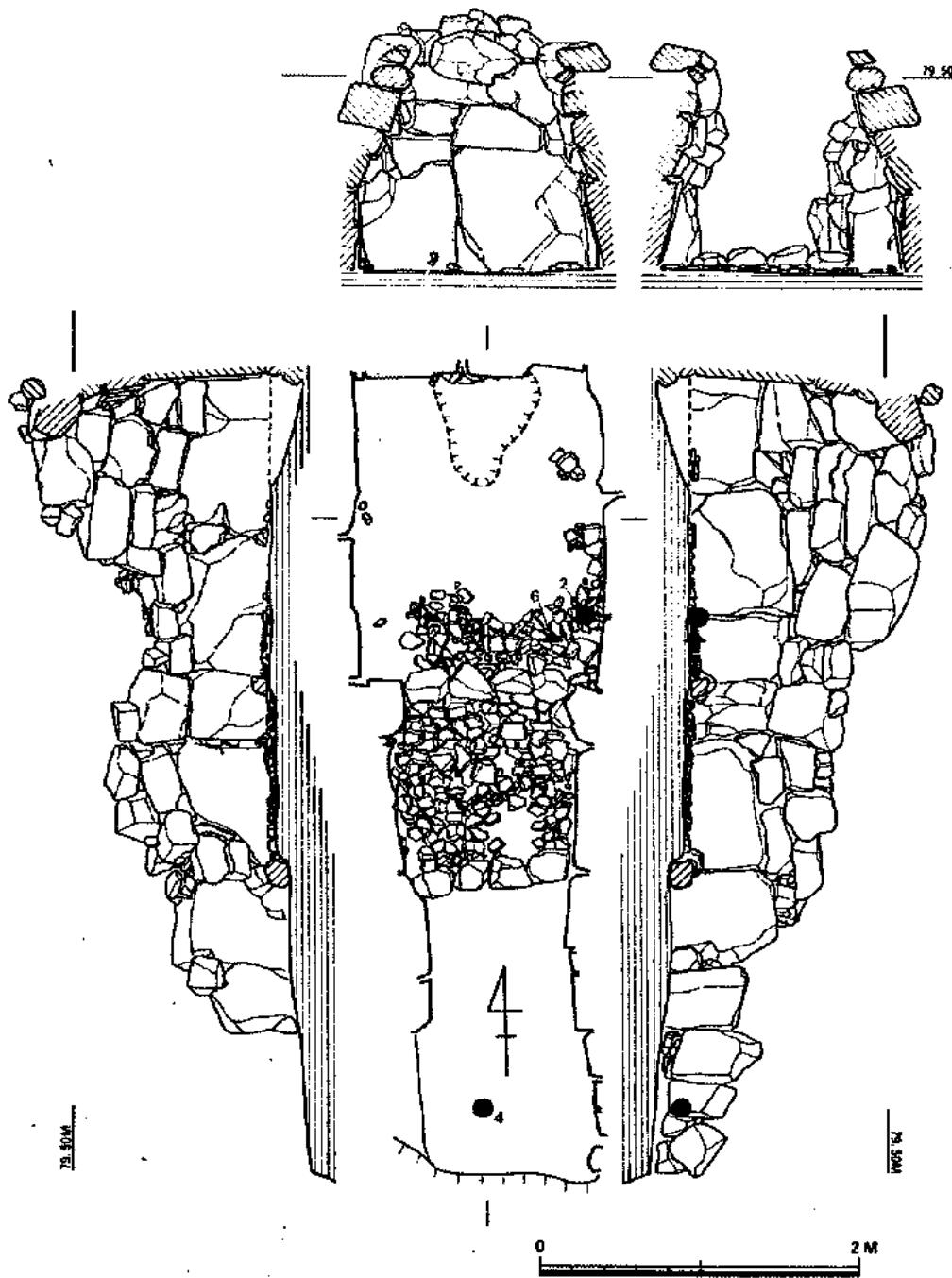
(2) 出土遺物(第7~10図)

玄室の床面、右側壁付近から、高杯(2)と鉄錆2点、また前庭部から甕(4)が出土した。さらに主体部埋土中から長頸壺口縁部(3)、墳丘地山整形面から杯蓋片(1)が発見された。

また本古墳付近の表土中から、瓶(5)が出土した。本古墳に関するものか定かではないが、一応本項で説明を加えておきたい。



第6図 F-5号墳閉塞石実測図(1/40)



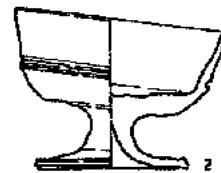
第7図 F-5号墳主体部実測図 (1/40)

須恵器 (第8図)

杯蓋 (1) 破片である。内面のかえりは内傾する。端部はとがり、かえりと天井部内面との境は明瞭である。器面は横なで調整である。色調は灰黒色で、胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。



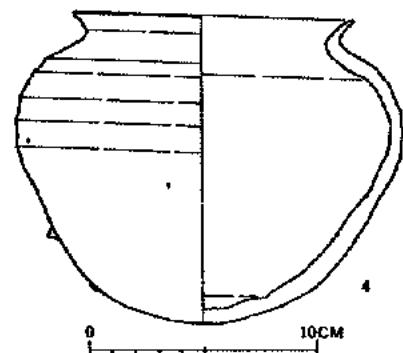
高杯 (2) 器形の亞みが大きい。杯の体部は開き気味に立ち上がり、口端部はとがっている。体部と底部の境には沈線がある。脚部は短くラッパ状に開き、据端部は凹みをもった段がつく。器面は杯体部と脚部が横なで調整、底部にヘラ削りの跡を残している。色調は灰黒色で、胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。



(3) 口縁部破片である。直線的にやや外開きに立ち上がり、口端部は丸い。2条の沈線を有し、器面は内外面共に横なで調整である。器形は長頸壺と思われる。色調は灰黒色で、胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。



壺 (4) 頸部は短く外反して立ち上がり、口端部はとがっている。体部最大径は中位より上にあり、底部は丸底である。頸部から体部上半は横なで調整、下半は格子目状叩き目である。内面の上半は横なで調整、下半には叩き目の痕跡がある。色調は灰黒色で、焼成は不良である。



第8図 F-5号墳出土遺物実測図 (1/3)

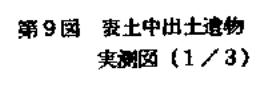
鉄器 (第10図)

鉄鎌 (6・7) 6、7共に範被の破片である。細根鎌と思われる。



表土中出土土器 (第9図)

碗 (5) 底部破片で、高台付である。高台端部は横にひき出される。内面見込みは不定方向のなでであるが、他は横なで調整である。色調は黄褐色、胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。



第9図 表土中出土遺物
実測図 (1/3)



第10図 F-5号墳出土
遺物実測図 (1/2)

2) F-6号墳

本古墳は標高80mの丘陵南側斜面に位置している。F-5号墳西側15mの所に隣接している。

(1) 主体部 (第12図)

石室掘り方は長軸を南北にとる。石室は南側に開口する单室の横穴式石室である。玄室平面形は方形に近いが、長軸がやや長い。腰石は奥壁に3石、左側壁に4石、右側壁に5石使用されている。床面には小砾が敷かれている。

袖石は両袖式である。両袖間には横石が設けられている。閉塞は樋石上で行われており、小塊石が積まれているが、その一部は墓道側に崩れている (第11図)。

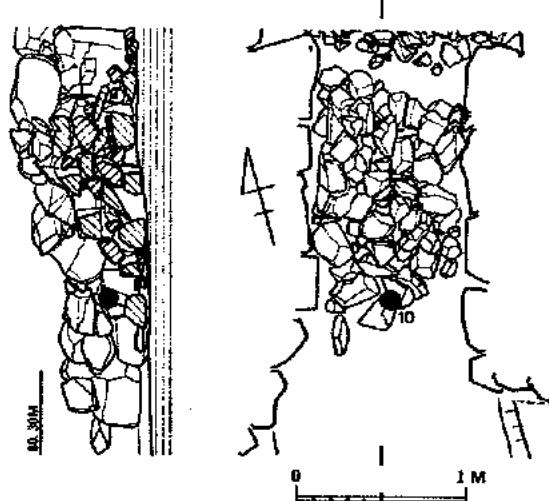
(2) 出土遺物 (第12・13図)

玄室の床面、左側壁側から、椀(9)と長頸壺(11)が出土した。また羨道部埋土中から長頸壺(10)、墓道埋土中から椀(8)が発見された。

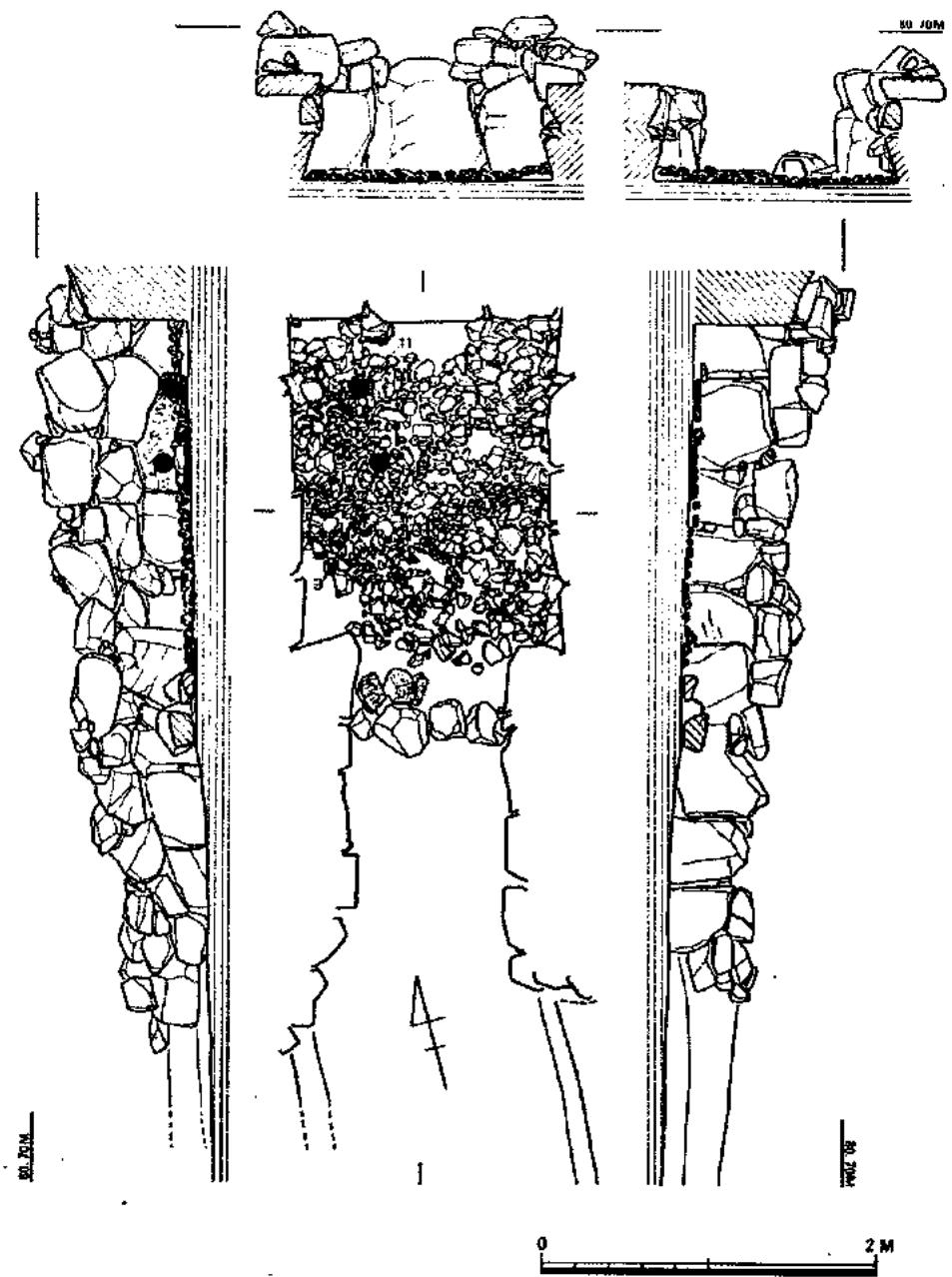
須恵器 (第13図)

椀(8) 体部から口縁部はやや外開きに立ち上がる。底部は平底である。口縁部から体部にかけて、内外面ともに横なで調整で、底部は内外面ともに不定方向のなで調整である。色調は黄灰色で、胎土に細かい砂粒を含んでいる。

椀(9) 体部から口縁部は直線的に開き、口端部はやや丸味をもつ。底部は平底である。底部には低い高台がつき、端部はやや横に引き出される。体部の内外面は横なで調整、底部内面は不定方向のなでである。また底部外面にはへラ削りの跡がある。色調は内面が赤褐色、外面が黄灰色で、胎土に細粒を含んでいる。

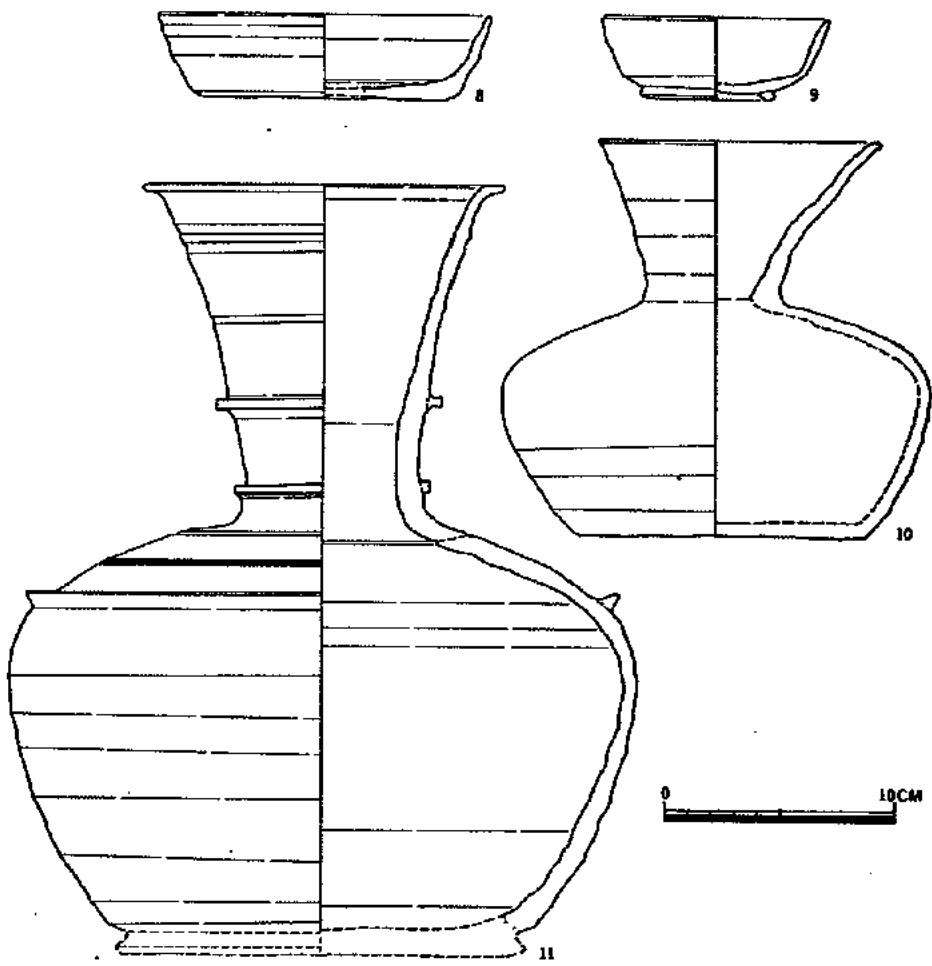


第11図 F-6号墳閉塞石実測図 (1/40)

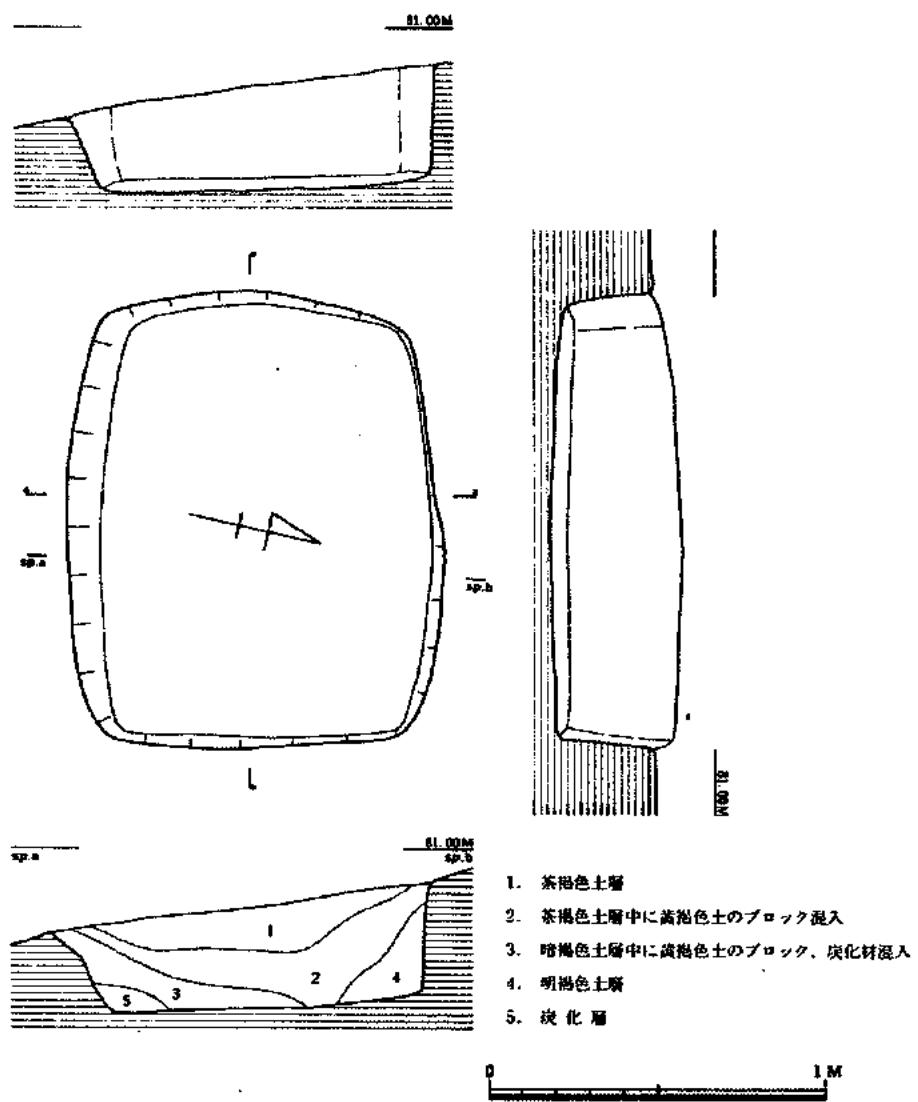


第12図 F-6号墳主体部実測図 (1/40)

長頸壺 (10) 頸部は歪んでいるが、やや直線的に開き、口縁部はさらに外反する。口端部はやや下方に引き出され、とがっている。体部は上半部で肩が張り、体部の最大径は中位より上にくる。頸部は内外面ともに横なで調整で、体部の上半部はカキ目調整である。体部下半は静止ヘラ削りで、底部はなで調整である。色調は灰黒色で、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は良好である。



第13図 F-6号墳出土遺物実測図 (1/3)

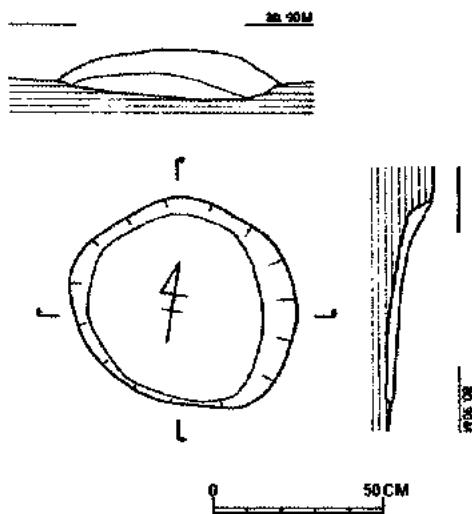


第14図 F-1号土壤実測図 (1/20)

長頸壺 (11) 頸部は細く直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口端部は横方向に引き出され、丸味をもつ。体部は上半部で肩が張り、体部の最大径は中位より上にくる。底部は欠けているが、短い高台がつくと推測出来る。

頸部上半には2本の沈線、中位に1本の沈線がめぐる。また下半には凸帯が2本めぐり、凸帯中央はややくぼみをもつ。体部最大径のやや上にも凸帯が1本まわり、凸帯端部は鋭くとがる。さらに体部上半には1本の沈線が2箇所めぐる。

頸部内外面、体部上半は横なで調整である。また体部下半は、ヘラ削りである。色調は灰黒色で、胎土中には砂粒を含んでいる。



第15図 F-2号土壺実測図 (1/20)

3) F-1号土壺 (第14図)

掘り方は長軸を南北にとる。平面形は隅丸長方形で、 1.4×1.1 mである。床面は平坦で、深さは約0.3 mである。埋土は自然堆積を示しているが、床面の一部に、炭化層が認められ、その上に炭化材混入土層が堆積していた。但し、床面と壁面には焼けた痕跡は認められなかった。

また前回報告分の浦谷古墳群Iでは、G-5号墳の背後の丘陵上面で、4基の焼土壺が検出されている。形状は隅丸長方形のものが3基と、円形のものが1基であるが、いずれも床面と壁面が赤く焼けており、床面に炭化物が堆積していた。さらに規模において、隅丸長方形のものについては、長軸約3 mおよび2 m前後と本址よりも大形である。

すなわち、形状および炭化層の堆積については焼土壺と類似点はもつものの、規模や床面、壁面に焼けた痕跡がないことから、本址を土壺として取り扱う。また本址はF-1号墳の周溝の一部を切って構築していることから、周溝との先後関係では、本址の方が新しい。

4) F-2号土壺 (第15図)

平面形は円形で、径約0.6 mである。深さは約0.05 mで、ひじょうに浅く、底面はすり鉢状を呈している。

2. J群の調査

J群は古墳4基で構成される。標高約80mの尾根の南側と東側に分布する。

1) J-1号墳

本古墳は標高81~82mの丘陵南側斜面に位置し、墳丘は全て失われている。

(1) 主体部 (第18図)

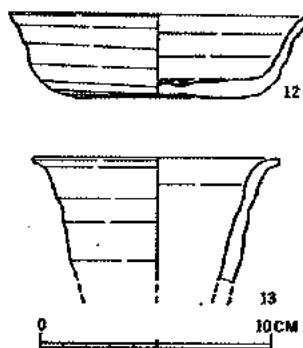
石室掘り方は長軸を南北にとる。石室は南側に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は長方形である。腰石は奥壁に2石、両側壁に3石ずつ使用されている。玄室床面には小槻が敷かれている。袖石は両袖式で、両袖間には4石の平石が置かれ、袖石となる。閉塞は粗石上あるいは粗石前面で行われたと思うが、ほとんど墓道側にくずれていた (第17図)。

(2) 出土遺物 (第16・18図)

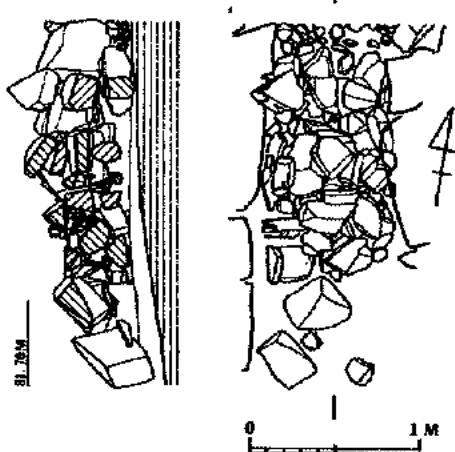
玄室の床面、左側壁付近から椀(12)が、また埋土中から長頸壺片(13)が出土した。

須恵器 (第16図)

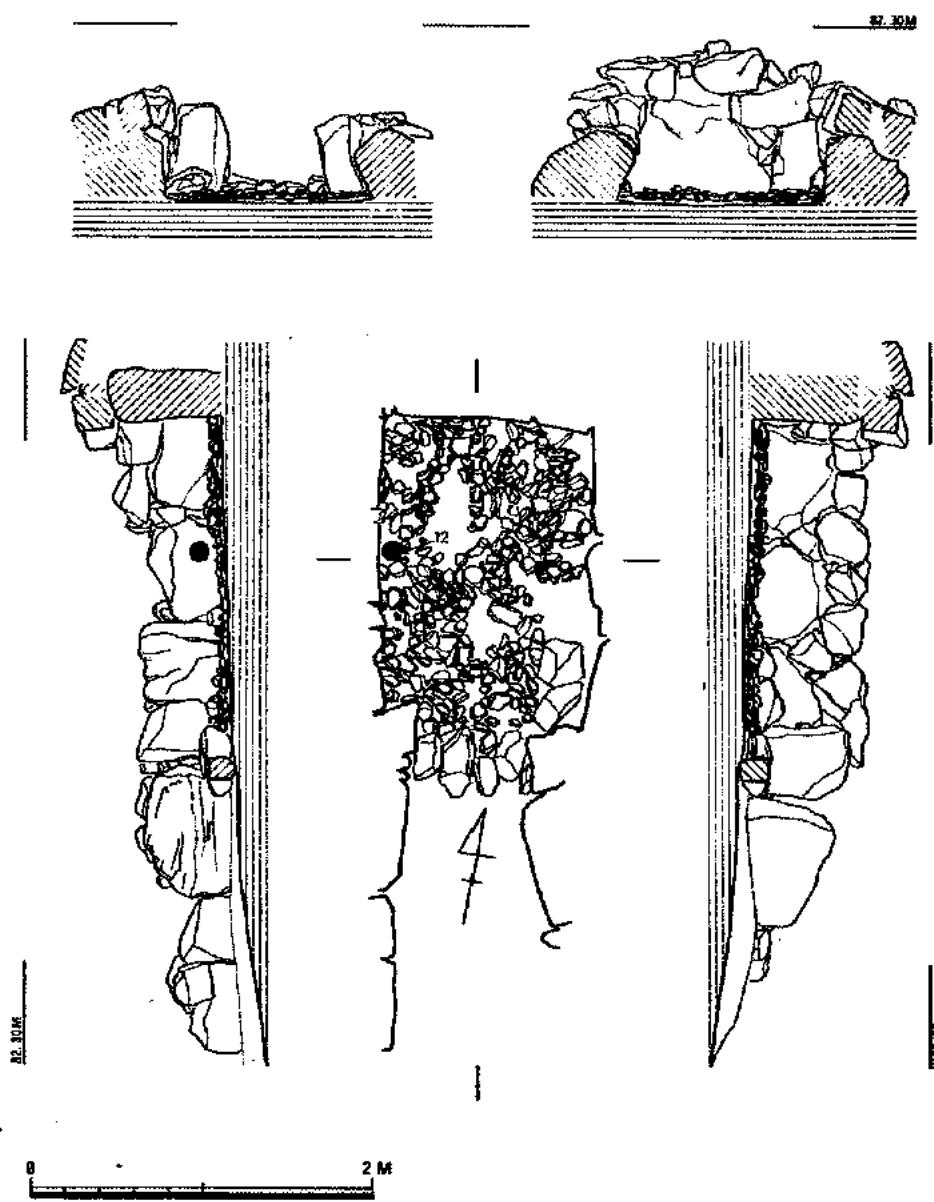
椀(12) 体部は外開きに立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸味をもつ。底部は平底である。調整は内面が横なので、外面は口縁部から体部にかけてが横なので、底部と体部の境および底部はへラ削りである。



第16図 J-1号墳出土遺物
実測図 (1/3)



第17図 J-1号墳閉塞石実測図 (1/40)



第18図 J-1号墳主体部実測図 (1/200)

る。色調は灰色、胎土には若干砂粒を含み、焼成は良好である。

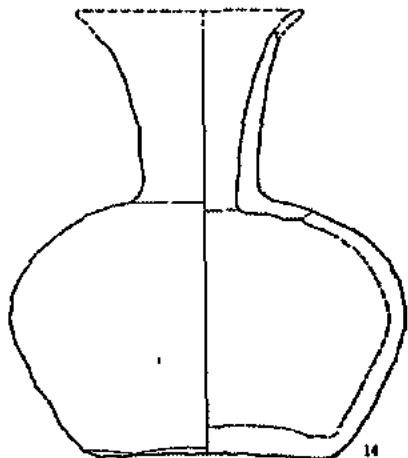
長頸壺 (13) 頸部から口縁部にかけての破片である。頸部は外開きに立ち上がり、口縁部で外反する。口端部は横に引き出され、丸味をもつ。内外面ともに横なで調整である。器形は長頸壺であると思われる。色調は黒灰色で、焼成は良好である。

2) J-2号墳

本古墳は標高83mの丘陵南側斜面に位置し、J-1号墳の西側10mの所に隣接している。また墳丘は全て失われている。

(1) 主体部 (第20図)

石室掘り方は長軸を南北にとる。石室は南側に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形はほぼ方形である。腰石は奥壁・両側壁とも3石ずつである。玄室床面には、奥壁側半分に敷石が残っている。また袖石は両袖式である。

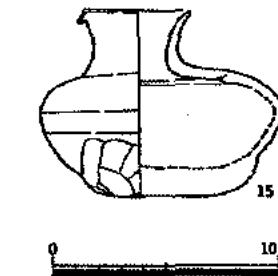


(2) 出土遺物 (第19・20図)

玄室の床面、右側壁付近から、長頸壺(14)と平瓶(15)が出土した。

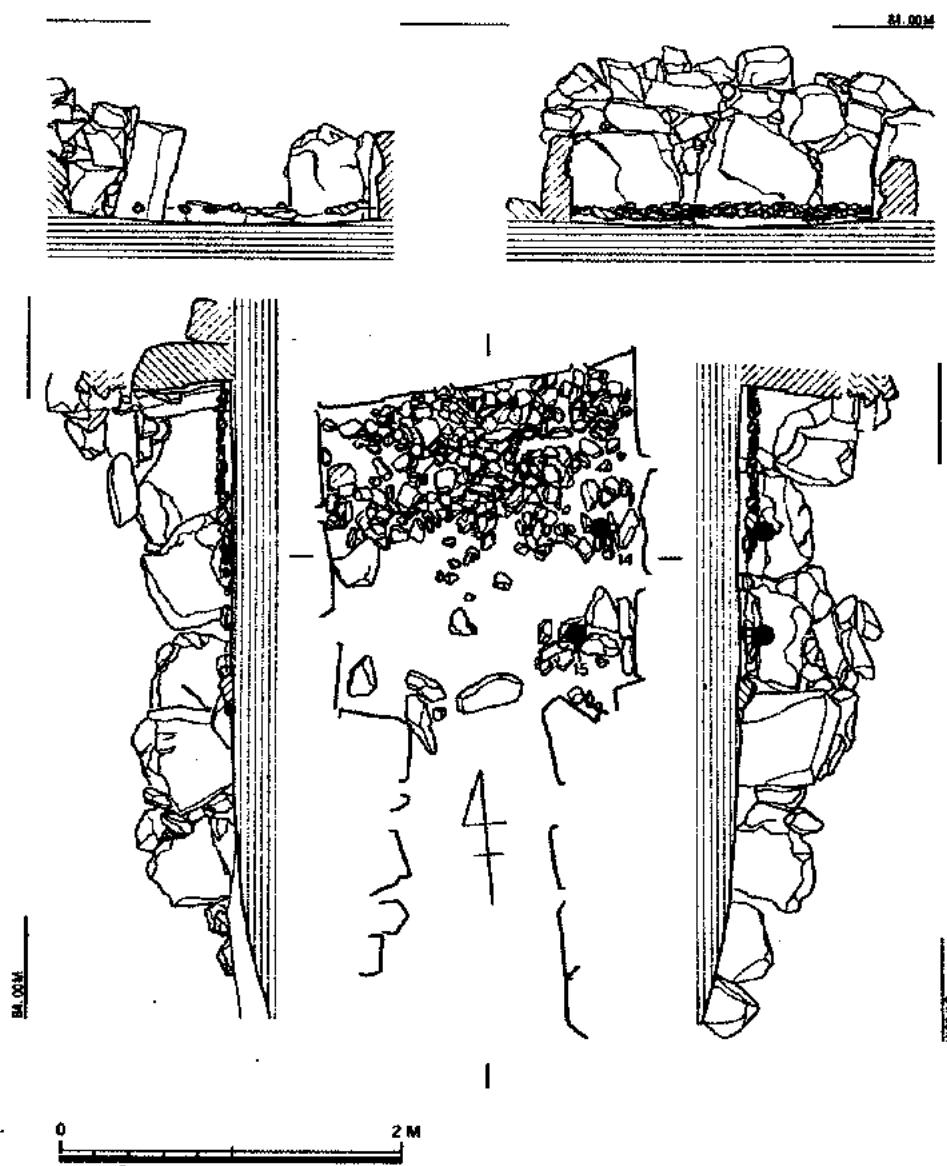
須恵器 (第19図)

長頸壺 (14) 口縁部は欠失している。頸部は細く、やや外開きである。体部最大径はほぼ中位にくる。頸部内外面、および体部は横なで調整で、底部は静止ヘラ削りである。色調は灰色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。



平瓶 (15) 小形品である。頸部は短く、外反する。口端部はやや横に引き出され、とがっている。体部は最大径付近で張りをもつ。底部は平底である。口頸部内外面および体部上半はなで調整で、体部下半および底部は静止ヘラ削りである。色調は灰色で、胎土中には砂粒を含み、焼成は良好である。

第19図 J-2号墳出土遺物実測図
(1/3)



第20図 J-2号墳主体部実測図 (1/40)

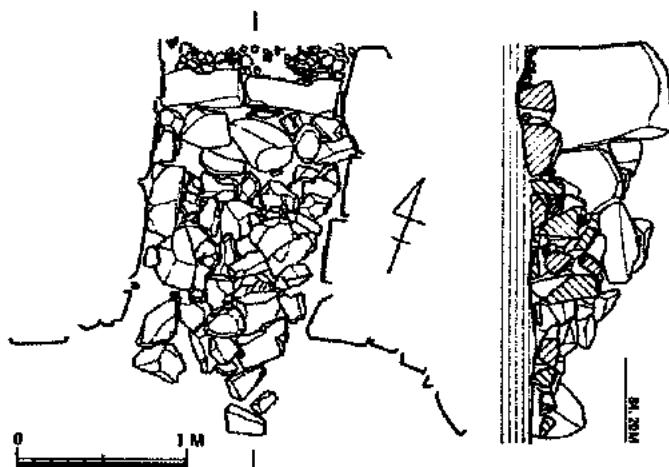
3) J-3号墳

本古墳は標高84mの丘陵南側斜面に位置し、墳丘は全て失われている。

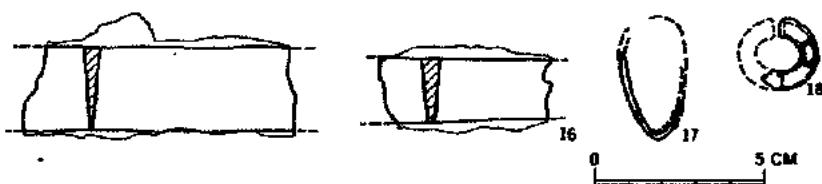
(1) 主体部 (第23図)

石室掘り方は長軸を南北にとる。石室は南側に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形はほぼ方形である。腰石は奥壁と左側壁に2石、右側壁に3石である。床面には小礫が敷かれている。

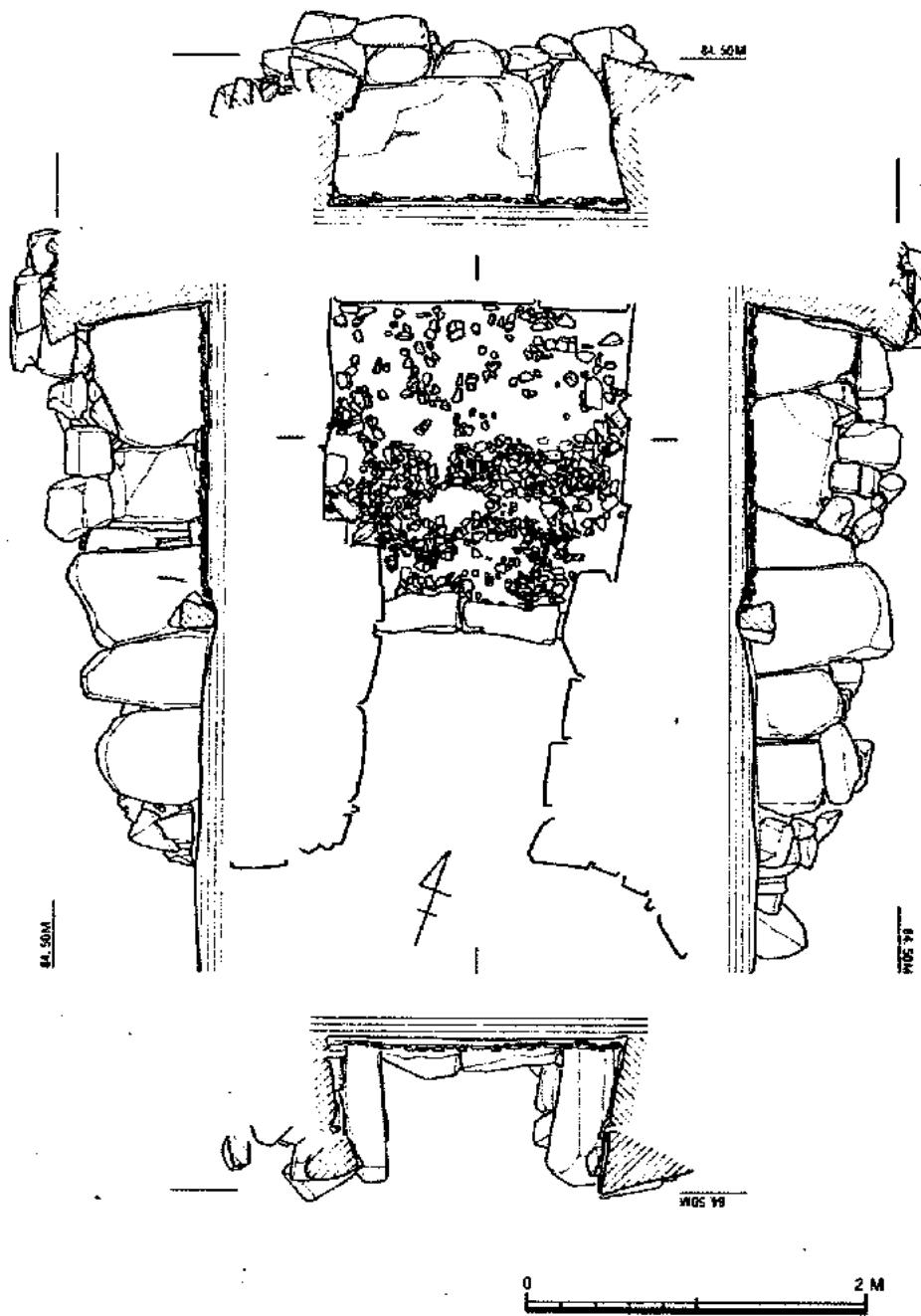
袖石は両袖式である。両袖間には2石の平石を横に並べ、相石としている。閉塞に用いたと思われる小塊石が狭道部に見られたが、崩れた状態であるため、閉塞の位置は不明である。ま



第21図 J-3号墳塞石実測図 (1/40)



第22図 J-3号墳出土遺物実測図 (1/2)



第23圖 J-3号墳主体部実測図 (1/40)

た、狭道部前面には貼石による前庭部が設けられている。

腰石の石材は、ほとんどが砾岩で、一部に砂岩を用いている。

(2) 出土遺物 (第22図)

玄室埋土中から、鉄刀の部分(16)と刀装具である資金具(17)、および耳環(18)の一部が出土した。

武具 (第22図16・17)

刀 16は直刀の部分である。16の左が刀身部にあたり、右が茎部である。現存部での刀身背部の厚みは、0.5cm、幅が2.5cmである。また茎部は現存幅が1.9cm、断面形は長台形である。

17は16に伴うと思われる資金具である。青銅製で、長径が推定で3.6cm、短径が推定で1.9cmである。

装身具 (第22図18)

耳環 半形品である。外径2cm、内径1.1cmを計る。断面は偏円形で、中は中空である。銀製のものである。

4) J-4号墳

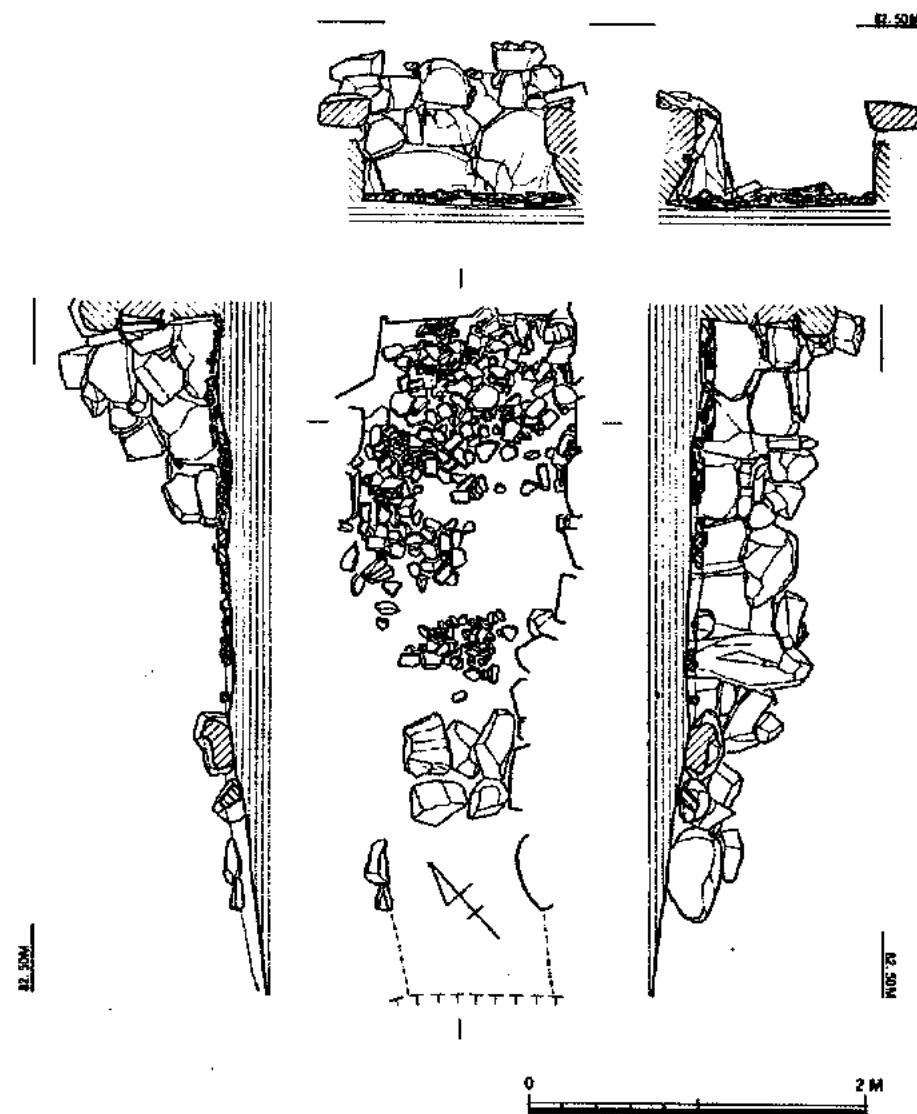
本古墳は標高81~82mの丘陵南側斜面に位置している。墳丘は全て失われている。石室の残存度は悪い。

(1) 主体部 (第24図)

石室掘り方は長軸をほぼ南北にとる。石室はほぼ南側に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は南北に長い長方形である。腰石は小振りの石を横長に用い、奥壁2石、右側壁5石である。なお、左側壁の玄門側の腰石および袖石、狭道部の左側壁の腰石は失われていた。玄室内の床面には、小砾が敷かれているが、殆どは失われていた。

袖石は片側を欠失しているが、石を縦長に用いている。袖石は狭道部に2列を配し、玄門側に3石を縦長に、墓道側に2石を横長に用いている。

以上、F-5・6号墳、J群の古墳について、概要を述べた。いずれも墓壙、周溝確認のため、東西、南北方向にトレンチを設けた。しかし、周溝が確認出来たのはF-5号墳のみである。また全ての古墳の墳丘は失われており、石室の腰石および腰石から2~3段目までの構造が残っているのみである。丘陵傾斜面に位置し、奥壁側での掘り方の深さは約1mである。反対に墓道側は、丘陵傾斜面を利用し、墓道を付設しなかったり、短いものが多い。



第24図 J-4号墳主体部実測図 (1/40)

3. 朝町山ノ口遺跡23号墳

市道朝町一登掛線の南側に位置する古墳1基は、朝町山ノ口遺跡の古墳群の一つとしてとらえられることから、朝町山ノ口遺跡23号墳とした。

昭和61年、宅地造成に先立ち、試掘調査が行われた時、本古墳は確認された。低丘陵に立地し、古墳の墳形も知ることが出来ることから、現状保存の方向で話が進められた。所有者の平和農産工業(株)との協議の結果、将来公園化し、古墳には手をつけず、現況のままで保存することになった。

1) 朝町山ノ口遺跡

遺跡は大字朝町字山ノ口に位置し、昭和57・58年度の発掘調査で22基の古墳が検出された。古墳は全て円墳で、標高40m前後的小丘陵の全面に分布している。

古墳の主体部は、横穴式石室と小型の竪穴式石室で、6世紀から7世紀にかけての古墳群である。

2) 23号墳 (第25図)

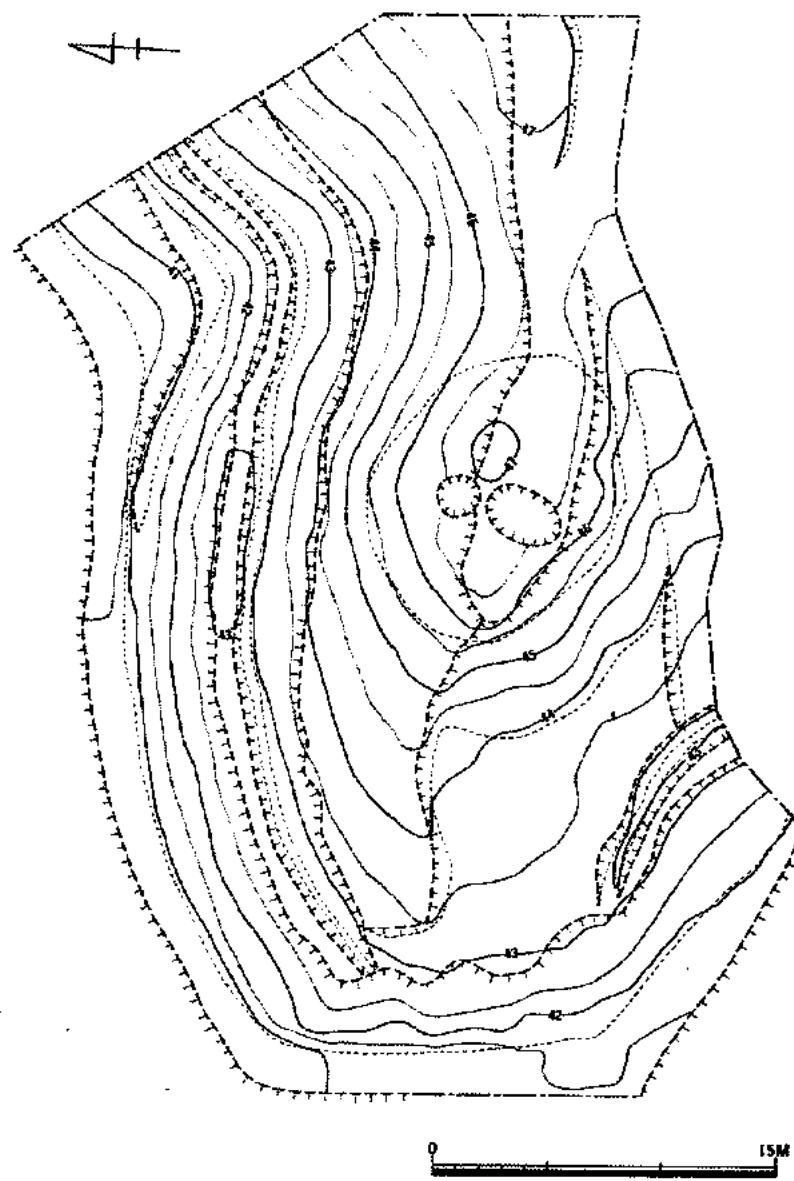
本古墳は、前回調査された山ノ口遺跡の、東側尾根上に位置する。尾根線の先端部に占地し、朝町山ノ口遺跡3号墳から東に約35mの地点である。古墳の最高位の標高は47mで、円墳である。墳丘径は推定で約11~13m、墳頂部には2箇所陥没がみられる。また主体部は横穴式石室が予想される。

第1表 石室計測表

(単位はm)

石室	全長	玄室※				袖石幅	出土遺物
		左	右	中央長	最大幅		
F-5	5.0	1.9	1.95	1.8	1.55	0.95	高杯、鉄鏃(玄室) 甕(前庭部)
F-6	4.4	1.85	2.0	2.1	1.5	0.9	甕、長頸壺(玄室) 長頸壺(表道) 甕(墓道)
J-1	3.75	1.7	1.75	1.85	1.2	0.65	甕(玄室)
J-2	3.85	1.85	1.95	?	2.0	0.8	長頸壺、平瓶(玄室)
J-3	3.9	1.45	1.55	1.8	1.75	1.1	鉄刀、刀装具、耳環(玄室)
J-4	3.5	?	1.9	2.5	1.2	?	

※ 玄室計測点の左と右は、左右袖石-奥壁間、中央長は第1幅石(奥壁側)と奥壁間をさす。



第25図 朝町山ノ口遺跡23号墳現況測量図 (1/300)

V まとめ

浦谷古墳群1・且の調査で、45基の古墳が調査された。そのうちの34基が7世紀初頭から7世紀後半にかけての古墳群である。それら古墳群は、主に占地状況から5支群（D・F・G・H・J群）に分けられる。今回調査分のF-5・6号墳、J群4基の古墳も、7世紀代としてこの中に含まれる。

これら古墳群は、標高80m前後の高位の尾根上に立地し、尾根の南側斜面に形成されている。調査時に墳丘を認める古墳はなかったが、低い墳丘の存在は予測出来る。また石室は丘陵傾斜面を利用した单室の横穴式石室で、ほぼ南側に開口する。さらに大きさは小型化している。

この時期に相当する古墳群は、朝町百田遺跡と朝町山ノ口遺跡に認められ、明確な一支群を形成している。石室形態としてT字形石室（朝町百田遺跡、朝町山ノ口遺跡）やコの字形石室（朝町百田遺跡）が現われる。浦谷古墳群においては、定型化されたT字形石室は認められないが、方形のプランをもつものは多い。またコの字形石室はH-2号墳がそれにあたる。

鉄生産に関するものは、浦谷古墳群、朝町百田遺跡、朝町山ノ口遺跡、野坂一町間遺跡、武丸高田遺跡等で検出されている（第2表）。いずれも釣川水系の上流域に位置する遺跡群で、7世紀代、終末期の古墳群も上流域に分布を示す。すなわち、釣川中流域に展開された古墳時代の遺跡群とは異なる、鉄生産を介した地域的まとまりが、この地にあったと推測出来る。

第2表 鉄関係遺跡地名表

遺跡名	所在地	遺構	内容	時期
浦谷古墳群	宗像市大字朝町字浦谷 ・給田	H群鉄滓埋納遺構	H-4号の墓道に須恵器壺を埋納 (壺内に鉄滓1点)	8世紀
朝町百田遺跡	朝町字百田	A-1号墳前面	前面の墓地に鉄滓が多数出土	5~7世紀
		B-2号墳前室床	鉄滓1点	〃
		B群鉄滓埋納遺構	倒立して埋められた土師器内に鉄滓	8世紀
朝町山ノ口遺跡	朝町字山ノ口	5号墳主体部	鉄鉗1・鉄鎌2	6世紀
		6号墳主体部	鉄鉗1・鉄鎌1	〃
野坂一町間遺跡	野坂字一町間	1号住居跡	鍛冶炉1基	5世紀
		4~6号住居跡	各住居跡から鉄滓出土	〃
		4号住居跡	壺1点出土	〃
武丸高田遺跡	武丸字高田	3・4号住居跡	鍛冶炉1基	6世紀

参考文献

原俊一 「宗像の考古学」『福岡考古第13号』 福岡考古学懇話会 1986

図 版



第26図 周辺遺跡分布図(1/25000) (「」内、右航空写真に対応)



浦谷古墳群I・II航空写真 (1/12500) (破線はI、実線はII調査区、●印は朝町山ノ口23号墳)

図版2



F群（南から）



J群（北から）



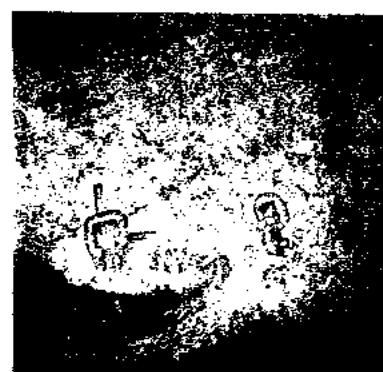
F-5号墳



J群（西から）



F-6号墳



J-2（右）・3（左）号墳



F-5号墳全景（南から）

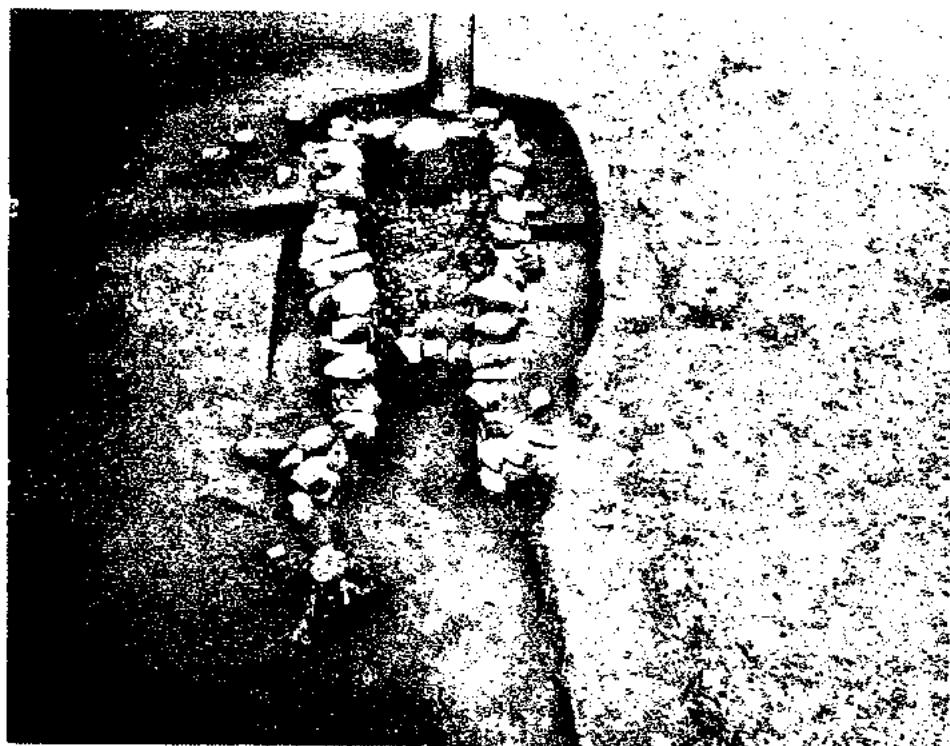


F-5号墳閉塞石と遺物



F-5号墳遺物出土状況

图版4



F-6号墳全景(南から)



F-6号墳閉塞石と遺物



F-6号墳遺物出土状況



J-1号墳閉塞石（奥壁から）



J-1号墳遺物出土状況

图版 6



J-2号墳全景(南から)



J-2号墳遺物出土状況



J-3号墳全景（南から）



J-3号墳閉塞石（奥壁から）

図版 8



J-4号墳全景 (南西から)



朝町山ノ口23号墳 (保存古墳・北から)



朝町山ノ口23号墳（東から）



朝町山ノ口23号墳（西から）

图版10



2

F-5号填出土土器 (2·4)



4



9



12



10



14



11

F-6号填出土土器 (9·10·11)



15

J-2号填出土土器 (14·15)

宗像
浦谷古墳群 II

宗像市文化財調査報告書 第16集

1988年3月31日

発行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 釜瀬印刷
福岡県宗像市河東